

ムスタン紀行「

仲 紀久郎

歸路にて

平成廿六年八月八日

早朝にジヨムソンを發ちて空路ポカラへと向ふ豫定なり。飛行機の時間に合はせ午前五時五十分ホテルに隣接せる飛行場へと向ふ。七時半迄待てども飛ばず。天候良好ならずとのことにて、一旦ホテルに戻り恢復を待つ。

二階食堂にて紅茶喫しつつ窓外を眺め時間を潰せり。ホテル前の道路を驢馬の行列通過す。背中に括り附けたる籠に生ける鶏多數押込まれたり。身動きかなはずとも、眼はカツと開きてあり。

又別の鶏三羽、ホテル向ひの木造三階建荒家あばらやの上あにあり。屋上にて飼ひたるものなるや、はた將又地上より四階まで自力にて飛び上がりたるや。

何時飛行機出發の聲掛るやも知れず、朝食時間なれども食事注文せず。朝食代りの林檎配らる。當地産にて丸齧りに適當なる大きさなり。昨夜の林檎ブランデーもこれを原料とすや。

再び窓外を眺むれば、羊に似たる犬あり。薄汗れたる白色にて面長、耳折れ華奢なる體軀なり。傍らの道端には、鬣たてがみ持ちて一見ライオンと見紛ふ大型犬あり。「あれは犬なりや、獅子なりや。」「眞に獅子に良く似たり。されど獅子の筈は無し。」皆放飼ひなり。

十一時に再度飛行場へと向ふ。小型機なれば、一度にて同行全員の搭乗叶はず。往路とは逆に今回は余等先行しN師等第二便となれり。

余等の第一便は、滞空時間約十五分にて無事ポカラに到着す。同機直ちにジヨムソンへと引返すべき處、ポカラを飛立たず。強風の爲第二便の飛行は中止となむ。

N師等、これよりジープにて下山と相成る。約八時間の道程なり。こちらのグループはN師始め歴戦の強者揃ひにて、揺れ激しく狭き車内にての八時間を物ともせずジープ旅行を楽しまれし御様子なるは流石修行者なりと云ふべきか。夕食には全員揃へり。

(平成二十七年九月十四日受附)